鉄砲洲神社素読論語　解説

（平成 24 年 3 月 16 日）

郷党 第十

儀式の様子が色々と説明してあります。孔子は礼儀作法をきちんとする人だったので、礼儀作法について色々と話しているのですが、現代ではなかなか合わない事が多いです。

【五】圭を執るときは、鞠躬如たり、勝えざるが如し。上ぐるには揖するが如く、下ぐるには授くるが如し。勃如として戦色あり。足 蹜蹜として循うもの有るが如し。享礼には容色有り。私覿には愉愉如たり。

圭は玉で作った細長い板のような笏（しゃく）で、天子が諸侯に与えたもの。それを携えて隣国に使者として見舞う時の印。主君から渡された宝器の圭を使う時には、身を屈めて畏れつつしんでいる様にし、圭は軽いのですが、その重さに耐えらない様な感じで持つ。圭を持ちあげる時には、人様に挨拶するような形で持ちあげ、降ろす時には人様に物を捧げる感じで丁寧に行うのが良い。顔色は変わって畏れおののく様な感じで、足は小刻みに動かして、すり足でそっと歩く。能や舞などでスッスッと歩く、すり足のような感じです。日本の能や舞のすり足は、ここら辺から出ているようです。主君からの贈り物を隣国の君主に献上する儀式を享礼と言いますが、一回目の謁見の時には、かなりピリピリするが、二回目の謁見の時には、少し和らいだ雰囲気が漂う。私的な会談には更にもっと和らいで、ゆったり愉快な様子が見えてくる。

礼儀作法の時には、畏れつつしみ敬いというのを強調して話している章ですから、あまり面白くありません。今の日本で云えば、外国の要人が来られて天皇陛下に会われる時には、このような厳粛な雰囲気だろうと感じます。

【六】君子は紺緅を以て飾らず。紅紫は以て褻服と為さず。暑に当りては袗の絺綌す。必ず表して之を出す。緇衣には羔裘、素衣には麑裘、黄衣には狐裘。褻裘は長くし、右の袂を短くす。必ず寢衣有り、長一身有半。狐貉の厚き、以て居る。喪を去きては佩びざる所無し。帷裳に非ざれば、必ず之を殺ぐ。羔裘玄冠しては、以て弔せず。吉月には必ず朝服して朝す。

君主たるものは、普段着の襟のふちは、喪服に使うような色の紺色や、神様に接する時の色トキ（朱）色を使って、襟は飾らないようにする。紅紫色は普段着には使わない。暑い時には、葛を使って拵えた布の単衣を着る（暑い時には、涼しそうな服を着るというふ

うに考えれば良いです）が、肌が透けないように下着を身につけ、必ず上着を着て外に出し、中にはいれない。緇衣には羔・裘は、黒色の上着で、黒い色の羊皮の毛皮を着るし、白い色は小鹿の毛皮を使う。「黄衣」というのは黄色い上着ですが、狐の毛皮を使います。「褻裘」というのは普段着。家で普段着を身につける時には、普段着の毛皮は長くし、動く時には邪魔にならないように右の袂を少し短くしておく。家にいる時には必ず夜着を使う。夜着は夜寝る時に着る服です。それは身長の一倍半と定められています。「狐貉」は狐やむじなです。そのような毛皮は暖かいので、家にいる時にはその様な物を使う。喪中の時には身を飾るものは全部外していたが、喪が明けた時には元通りにつける。「帷裳」というのは祭服の時につける、今でいえば袴のようなもの。袴を絞ってあるような服ですけれど、今の日本では説明しがたいものです。羔裘というのは吉事に使われ、黒い色の上着には黒い羊の毛皮ですけれども、黒い子羊の毛皮を身に纏って赤黒い冠をかぶるが、弔問に出掛けることはしてはいけません。吉月は毎月一日。これは必ず礼服を着て朝廷に出掛ける。

【七】斉するときは必ず明衣有り、布をもってす。斉するときは必ず食を変じ、居るには必ず坐を遷す。

神様をおまつりする時には、必ず沐浴をし清潔な服（浴衣みたいなもの）を着る。それは麻で作った布を使う。神様をおまつりする時には、必ずふだん食べている生臭い物は食べないでお酒も飲まない。必ず神様をおまつりする時には、ふだん座っている場所ではなく、異なる場所に座を移すものです。

孔子が斎戒沐浴して、神様におまつりする時の礼儀作法です。二千何百年前の朝廷の礼儀作法ですから、やはり今には合いません。